

# NJ素流協 News

平成24年9月30日 第93号

平成24年9月30日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館9階)  
 TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

## 第2回国産材利用拡大推進会議を開催

今年度の第2回国産材利用拡大推進会議が、9月27日、盛岡市の農林会館会議室において開催された。主な報告・協議事項は次の通り。

### 一、原木等の需給動向について ア、素流協の出荷実績と見通し

今年度4月から8月までの累計出荷量は約8万2千<sup>3</sup>m<sup>3</sup>である。うち合板用素材は約5万5千<sup>3</sup>m<sup>3</sup>でカラマツが主体である。製材用等素

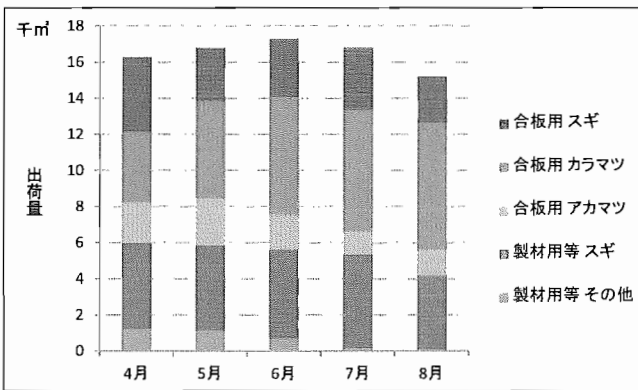


図 平成24年度NJ素流協出荷量の推移

材は約2万7千<sup>3</sup>m<sup>3</sup>でスギが主体である。月別の出荷量を図に示す。

製材用等素材のうち集成材用素材については、規格の変更に供給側が対応しきれず、納入量が減少している。

### イ、合板工場等の需要動向

#### 【櫛カリヤ】

震災復興住宅向けに、県産材を利用したフロア材を供給する準備を行っている。ある程度の需要量が期待できる。

#### 【セイホク櫛】

減産体制は変わらない。合板業界の景気は冷え込んでいる。輸入合板、合板に代わるOSB等の木質面材との戦いである。国内合板の在庫は8月末で20万<sup>3</sup>m<sup>3</sup>を下回ると見られているが、値段は上がらずむしろ若干下がっている。ここで復興需要に向けて、地域材合板を生産する取組みを始めている。

NJ素流協からの納入量は6月以降増えているが、生産品目によ

りカラマツ等の必要数量が増加したことによるものである。

#### 【ホクヨープライウッド櫛】

減産の効果で在庫量が減り、今後生産量を一段上げる方向性が見えてきたところである。

#### 【有川井林業】

集成材業界の状況も非常に厳しい。為替の影響で輸入材が安く入ってくる状況が年内は続く。年明け以降に期待している。

#### ウ、素材生産業者の生産動向

◎岩手県森連では、震災前は月間1000<sup>3</sup>m<sup>3</sup>の合板用材を出荷していたが、枠が減ったためその分だぶついている。共販については昨年とほぼ同量の出荷があるが、価格については震災直後より安くなっている。特にスギ2m材、4m材22cm下の売行きが悪く、価格も5000〜10000円/m<sup>3</sup>ほど下がっている。

今年度から補助事業で間伐材の搬出が義務付けられるようになり、機械の導入もありB、C材の納入先の確保が課題である。

◎岩手県国生連では、年内はほとんどが国有林の請負事業であり、立木はゼロに近い。非常に厳しい状況が続いており、来春を期待している。

◎青森県森林整備協では、組合員の大半が12〜1月までは請負事業を行っている。通年10万<sup>3</sup>m<sup>3</sup>生産しており、半分が岩手に供給、うち半分が合板、集材用素材等である。手持ちの山もあり、需要が拡大すれば供給はできる状況である。

◎青森県国生協では、合板、集材用材は民有林材が主体である。月産約1000<sup>3</sup>m<sup>3</sup>になるようにコントロールしている。立木で持っているものもかなりある。立木は高い時に買って売るときは安く売っている。発注量に対しては納入できるようにしたい。

◎他に供給側の出席者からは、「丸太を伐つても売れる状況になく、現在ほぼ100%国有林の請負事業を行っている」「A材は売れるがB、C材が売れない」「川下の



市況は製材、梱包材、パレットとも非常に悪く、半年、1年後を指して我慢するしかない」等の報告があった。

三、東北森林管理局からの情報

24年度の管内販売計画量は67万8千<sup>3</sup>m<sup>3</sup>であるが、スタートが遅れ9月末の生産量が28万<sup>3</sup>m<sup>3</sup>で計画の約40%の達成率である。販売価格はスギで平均6900円/m<sup>3</sup>(合板込み)で年度当初想定した価格より500円下がっている。カラマツ9100円/m<sup>3</sup>、針葉樹低質材で1200円/m<sup>3</sup>である。落札

しない材が増えてきている。システム販売については、9月に2回目の公告を行い、製材所等にPRしたが特に低質材で申請が少なく厳しい状況である。

四、岩手県からの情報

きのこ原木が全国的に不足しており、原木林について情報提供願いたい。

市売り主体の西日本では春先に丸太価格が暴落したが、本県では直送の割合が高く大暴落は免れている。需要が落ち込んでいる状況

の中で、岩手県地域型復興住宅に係る地域住宅生産者グループを中心に需要拡大を図りたい。また市町村が整備する公共施設及び復興公営住宅の仕様に県産材使用について記載される予定である。

国においては、平成22年に「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」を制定し、岩手県においては、平成16年に「岩手県公共施設・公共工事木材利用推進行動計画」を策定して、国産材・県産材を使用する方針を定め

ている。また一部の市町村において木材利用の方針が策定されており、他の市町村においても年度内に策定される予定である。

UR都市機構においては、フロア材の台板を輸入材から国産のものに切り替えた。また東京都港区では、港区内で建てられる建築物等に、港区と協定を締結した自治体から産出される木材を使用することを推奨しており、石巻市等が協定を締結している。

【質問】宮古市川井で計画されている木質バイオマス発電施設についての情報はあるか。

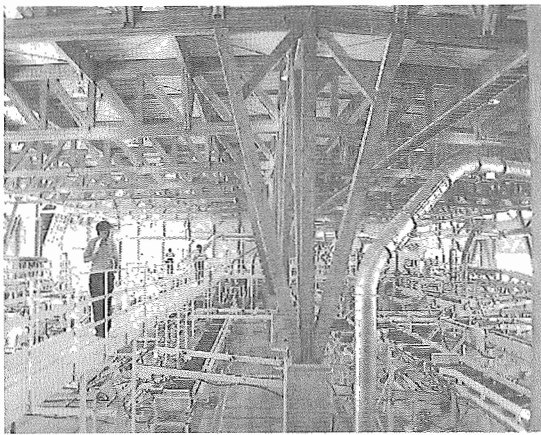
【回答】来年秋〜冬に着工予定であり、来年春から仕入れが始まる。仕入れ価格については未定。

【質問】合板の輸入原木の動向は。 【回答】長尺合板については米材(ダグラスファー)を使っているが、国産材で対応できるならば使いたい(セイホク)。メーカー指定により1級強度の出せるラーチ(ロシアカラマツ)を使っている(ホクヨープライウッド)。

**木勉会、アスクウッド・  
秋田製材協同組合を見学  
(秋田市)**

9月7日に開催された第186回木勉会では、今年6月に竣工した秋田スギ専門大型製材工場 アスクウッドの見学会が行われた。

秋田県では近年、秋田スギ人工林が利用間伐期または収穫伐期を迎え、豊富な資源を持ちながら、県内製材工場の零細化や経営基盤の脆弱化のために、全国の先進地や輸入製材品との価格競争で遅れをとったと言われている。工場は、量産体制による低コスト化や、



市場ニーズに対応した各種製品の生産によって秋田スギのブランド力を高め、「秋田スギ製材維新」(同組合資料)を実現することを目指している。

同工場の年間原木消費量は14万8千m<sup>3</sup>(2交代勤務)、工場建設に係る総事業費は約23億7千万円(うち補助対象事業約21億6千万円)で、七曲臨空港工業団地内の約9万9千m<sup>2</sup>の敷地に、製材工場棟(写真)、小割修正挽き棟などのほか、高温・中温乾燥機、原木自動選別機、木屑焚きボイラ等が配置されている。この日は、木勉会と北上川上流流域森林・林業活性化センター研修会の共同開催で、参加者が多数集まり、秋田製材協同組合 長崎専務と 同 小松業務部長の説明と案内を受けながら、各棟を見学して回った。

**平成24年度合法木材供給  
事業者認定団体研修**

9月6日、7日の2日間にわたり、東京木材会館において、(社)全国木材組合連合会主催の合法木材供給事業者認定団体研修が開催された。全国の林業・木材産業団体等の職員が参加し、違法

伐採問題の最近の動向や発電利用木質バイオマスの証明等について、林野庁ほか関係機関の役員による講義を聴いた。当NJ素流協からも事務局職員が出席した。

今年7月、再生可能エネルギーの固定価格買取制度が始まった。これに伴い、従来の合法木材の分別・管理、証明に加えて、発電利用に供する木質バイオマスを供給する事業者は、林野庁のガイドラインに沿って木質バイオマスの適正な分別・管理と証明を行うことが求められる。

**第38回中小企業団体  
岩手県大会で優良組合表彰**

9月14日、盛岡市内において第38回中小企業団体岩手県大会が開催され、NJ素流協が「業界の発展に寄与した」として大会表彰を受けた。下山理事長が表彰式に臨み、岩手県内の他の4団体とともに、岩手県中小企業団体中央会 谷村会長より表彰状を授与された。

**NJ素流協・高橋常務が  
山形県で講演**

9月25日山形県最上総合支庁において、県・市町村や森林組合職員を対象に、木材の流通販売に関する研修会が開催され、NJ素流協 高橋常務理事が講師を務めた。

**野生きのこ放射性物質モニタリング検査結果(岩手県)**

岩手県は市町村と連携して、県内の全市町村を対象に、国の定める方法により、ゲルマニウム半導体検出器による放射性物質濃度測定を行っている。9月は5回の検査を行い、のべ10市町村で10種類の野生きのこについて調べ、結果をホームページ等で公表した。それによると、9月11日の検査で、一関市で採取されたホウキタケから、国の安全基準値である、食品1kgあたり100ベクレルを超えるセシウムが検出された(セシウム134、セシウム137合わせて1400ベクレル/kg)。よって、県は同日付で一関市に対し、全種類の野生きのこの出荷及び採取の自粛を要請した。その他の市町村については、基準値を超える濃度のセシウムは検出されなかった。

# お知らせ

10月13日(土)より、NJ素流協の事務所を農林会館9階から5階に移転します。今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

# 今月の名木・巨木 6 (久慈市)

久慈市指定天然記念物

## 慈光寺の杉並木

指定…1997年9月1日

所在…久慈市大川目町22-62



慈光寺の杉並木は、久慈城跡に隣接する慈光寺の参道約300メートルにわたる巨木の並木である。

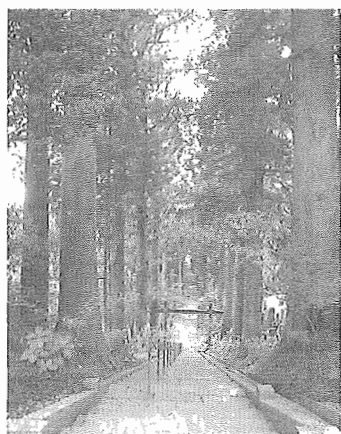
樹齢約200年、直径2メートルを越す巨木74本が立ち並ぶ姿は圧巻で、異空間に迷い込んだかのような錯覚を覚える。所々に、軍

用船等に供されたものの切り株がある。

慈光寺は、当地を治めた久慈氏の菩提寺であったが、久慈氏の滅亡により一時期当地を追われた経緯がある。

久慈氏は、南部氏の流れを汲み当地方を鎌倉時代初期から安土桃山時代まで300年以上にわたり治めたと伝えられている。

豊臣秀吉が天下統一を果たした翌年の1591年、久慈氏十八代直治と十九代政則が、九戸城主九戸政実と三戸城主南部信直との争乱に参戦した。久慈氏は政則の兄である九戸政実方につき九戸城に籠城、秀吉に派遣された大軍との



激しい攻防の末、相手方の謀略により降伏した後に処刑された。り廃寺となったが、明治13年に再興され今に至っている。

城主を失った久慈城は翌年、豊臣秀吉の諸城破却命令により取り壊され、慈光寺もその後二度に渡り天然記念物となっている。

### 冗談欄 「助詞に注意」

「大人買い」という言葉が話題になり、新聞で知った。に物を言わせて、大量に購入する」というニュアンスがあり、良識ある大人なら決してしない品

前から使われており、国語辞典にも載ったらしい。「大人げない買い方」であるとも言われる。

低価格な子供向け商品を大量

に購入することである。少年時代に出来なかつた夢を、金銭的に余裕の出たきた大人になって果たすというものであり、おまけ(おもちゃ)付きお菓子などを大量買いすることである。

ある種の「まとめ買い」である

が、家庭の主婦がトイレットペーパーなどの生活用品を大量買いするのは「大人買い」とは言わないようだ。特に、女性による大人買いを「乙女買い」と言い換える人も

いるようだ。「乙女買い」とは乙女「が」子供たちが小遣いで少量ずつ買う安い商品を大のおとなが金ではないので間違わないように。

平成24年9月分の販売実績

- 1 合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約800㎡増加、カラマツが約1,460㎡減少、アカマツが約260㎡増加し、全体では約190㎡減少している。昨年同月と比較すると、スギが約1,040㎡増加、カラマツが約3,400㎡増加、アカマツは約1,150㎡増加し、全体では約5,990㎡増加している。今月はシステム販売取扱いはなかった。
- 2 その他（合板用以外）の出荷量は前月より約280㎡減少、昨年同月より約750㎡減少している。
- 3 今年度の年間計画量に対する出荷量の割合（目標達成率）を50%とすると、今年度の全体出荷実績は、計画数量を9.5ポイント下回る結果となった。

(㎡)

樹種	長級 (m)	当 月 出 荷 量			今 年 度 累 計			
		合板用	その他製材用等	計	合板用	樹種別割合 (%)	その他製材用等	計
スギ	2.0	2,136			13,009			
	4.0	1,243			6,645			
	計	3,378	3,806	7,184	(2,052) 19,654	29.7	27,410	(2,052) 47,064
カラマツ	2.0	3,292			22,283			
	4.0	2,044			12,347			
	計	5,336	41	5,376	(563) 34,630	52.3	3,053	(563) 37,684
アカマツ	2.0	1,293			8,616			
	4.0	405			2,660			
	計	1,698	0	1,698	(0) 11,276	17.0	98	11,375
その他針葉樹		405	73	478	598	0.9	131	729
広葉樹		0	0	0	0	0.0	260	260
合計		10,817	3,920	14,737	(2,615) 66,158	100.0	30,953	(2,615) 97,111
目標達成率 (%)								40.5
今年度計画量								240,000

( ) はシステム販売取扱量 (内数)

落穂拾い

今年の秋分の日は9月22日の土曜日であった。周知のことであるが、秋分は春分と同じく一年の中で昼と夜の長さが同じになる日である。春分・秋分の日は昔から仏教用語の「お彼岸」と呼ばれ、先祖供養の日とされている。

なぜ落穂拾い子が「秋のお彼岸」を取り上げたかという点、この日近くのスーパリーの食品売り場で「今日はお彼岸です、お供え・おはぎ」の札がついて並べられているのを見て、日頃甘いものを敬遠している小生もつい衝動買いしてしまったことにある。子どもの頃、お彼岸には家でもお袋さんがおはぎを作って仏壇に供えたり、親しくしているお隣さんに届けたりしたことを懐かしく思い出したことによるかもしれない。

ある本によると、秋分の日にお供えする「おはぎ」は春分の日には「ぼた餅」と呼ばれると書かれており、この二つは同じものである。ただ昔は、秋に収穫したての小豆をそのままつぶしあんにしたもので作るのが「おはぎ」で、冬を越して固くなった小豆をこしあんにしたのが「ぼた餅」という違いがあったという。また、春の花・牡丹、秋の萩に見立てて、牡丹餅、御萩と呼んだのだともいう。

現在は「秋分の日」は祝日であり1日だけであるが、本来「秋分」とは9月22日ごろから10月の7日頃までの期間をいうのである。昔から暦には地球が太陽の周りを一周する時間の長さを1年とする「太陽暦」と月が新月から次の新月にな

るまでを1か月とする「太陰暦」があった。わが国でかつて使われていた「旧暦」というのは、太陽暦と太陰暦を組み合わせた太陰太陽暦のことで、明治5年(1872年)に太陽暦(新暦)に改暦されるまで長い間親しまれてきた暦である。この旧暦を二十四等分した二十四節気というのがある、その一つが秋分である。まさに「秋」という季節の中央に位置する期間ともいうべきものであろう。

さらにこの秋分の季節を3等分して、「雷之声を収む」の候(9月22日〜9月27日頃)と「蟄 虫戸を壊す」の候(9月28日〜10月2日頃)と「水始めて濁れる」の候(10月3日〜10月7日頃)がある。初めの候は、夕立に伴う雷が鳴らなくなる頃で、入道雲から縹雲に変わって秋空が晴れ渡るとともに松茸の出始めであり、彼岸花(曼珠沙華)の赤い花が咲くのである。次の候は、虫類が土の中に潜り込んで巢籠りの支度をする時期で、中秋の名月を仰ぎながら団子ではなく新鮮なさんまの塩焼きで酒を楽しむ。また芋煮汁の旨い時期でもある。最後の候は、田圃から水を抜き稲刈りに取り掛かる時期で、たわわに実った稲穂が垂れ下がり、収穫の秋真っ只中という光景が見られるのである。ちなみに1年の季節の移ろいについて「気候」という言葉を使うが、二十四節気の「気」と七十二候の「候」を合わせて「気候」というのである。

今回は、お彼岸のおはぎの衝動買いから二十四節気の「秋分」にまで及んだが、その大半が「日本の七十二候を楽しむ」旧暦のある暮らし(白井明大著)の孫引きである。